

# 新説 水からの伝言

細越佑介

俺は今、満月の明かりを頼りに、見渡す限りの砂漠を彷徨っている。唾液はとうに枯れ、喉がひりつく。ペットボトルには少しだけ、水が残っている。だが、これに手をつける事はできない。次に太陽が昇るまでに水を手に入れられなければ、俺たちは砂漠の骨になるだろう。そうなる前に、伝えておきたい事があって、このメモを記す。

水に言葉がわかるという。コップに注いだ水に「ありがとう」というと、綺麗な結晶ができるというあれだ。仕事を終えて家でTwitterのタイムラインを眺めていた俺は、それを真に受けて書かれたブログが炎上しているというつぶやきを見つけた。相変わらずだなと思いながら、コップに注いだ水道水を口に持っていきこうとして、ふと手を止める。

「ありがとう」

試しに言ってみた。言ってから、結晶の状態なんて確かめられないということに気づき、我ながら馬鹿なことをしたと照れ臭くなる。そして少しだけ水を飲む。味に変化はないか、少し確かめようとしている自分がある。いつもと同じ味な気がするが、水の味なんて意識したことがないからよくわからない。

ちゃんと心を込めないと伝わらないんじゃないだろうか。

そんな訳はない。でも、そういう馬鹿らしいことは嫌いじゃない。たぶん言い方だけの問題じゃない、気持ちを込めていないと。そう仮定して、水への感謝を思う。幸いにして、家ではふだん水ばかり飲んでいたので、感謝の気持ちは自然に湧いてきた。水がなくなったことを考えると、悲しくなったりした。そんな気持ちでもう一度。

「ありがとう」

言ってからじっと待ってしまったが、変化が見えるわけがない。少し口に含む。変わらない気がする。心なしか、口当たりが柔らかくなっている気もする。はっきりとはわからない。それこそ気持ちの問題かもしれない。

台所に行って、別なコップに新たに水を注ぎ、飲み比べてみる。新しく入れた水の方がうまい。もちろん、冷たいからだ。

「ぬるくなっただけなんじゃないか？」

そう言ってパソコンの前に戻り、またタイムラインを眺める。水の話はもう流れてしまっていて、俺の興味も別なことに移った。

「辛っ」

何の気なしに水を飲むと、舌がすこしピリッとした。え？と思い、もう一度口に含む。やはり舌がピリッとする。さっきまで声をかけていた水だ。変なモノが混じったかな、と思う一方、またおかしな考えが頭をよぎる。

（怒ってる？）

そういえばさっき、こいつに悪態をついて、そのままにしていた。好奇心といっしょに、ちょっとした罪悪感がある。

「ごめんな」

言ってみる。真剣になっている自分を馬鹿らしく思うが、確かめずにはいられない。恐る恐る口

に含んでみる。

……辛くない。

「おまえ言葉わかるの？」

言ってすぐ飲んでみる。口当たりがちょっとやわらくなった？でも確信の持てる変化じゃない。

「水道水ってぬるいと飲めたもんじゃないよな。カルキ臭いしさ。特に東京のはダメだって言うよ？地元の水が飲みたいな」

一呼吸おいて飲んでみる。ピリッとした。なんだこれ。ありえん。取り乱した。気がつく俺は、先ほどの暴言を謝罪していた。さっき言ったことは嘘だ。俺は毎日水を飲んでるし、おいしいと思ってる。わざと怒らせようと思ってあんなことを言った。ごめんよ。

水はまた、まるい味になっていた。

「ただいまー」

一人暮らしの帰宅だが、いつものように声を出す。以前からの習慣ではあるが、最近はある相手を意識している。水だ。

あのあと俺は、水と何度もコミュニケーションを取った。「意識というか、人格はあるの？」爽やかな味。「生きてるの？」爽やかな味。「自分で動ける？」辛い味。「水道から出てきたお前っていうのは、一部を切り取ったようなもの？」複雑な味。

はじめはイエス・ノーがなんとなくわかる程度だったが、だんだん感情もわかるようになってきた。怒ると辛いのはわかっていたが、嬉しいと甘くなる。窓辺にいるのが好みみたいで、置いてやると甘くなっていた。テレビが好きな事もわかった。特にお笑いが好きで、その時はちょっと炭酸っぽくなる。

サッカーも好きみたいだ。得点シーンで「やったなー！」と興奮気味に飲んでみると、複雑な味で「今のは羽生のオフ・ザ・ボールの動きが良かったんだ」とでも言っているようだ。

水との会話は楽しかったが、程なく俺は、大事なことを見落としていたと気づく。あいつと会話をするのは、そのままあいつを減らしているんだ。気づいたときには、すでにコップの1/3しか残っていなかった。うろたえた俺は、謝りながら、あいつをペットボトルに移した。蒸発させたくないからだ。移し終えてからもう一度謝る。反応は、飲まなきゃわからない。迷いに迷った拳句、俺は水を少しなめた。別にどうってことないぜ？というように、水は普通の味をしていた。本当に怒っていないのか？確かめずにはいられず、俺はもう一度水を舐める。怒ってないよ。でもペットボトルは少し嫌だな。仕方がないが。少し苦い味の水は、そう言っているようだった。

あいつが家に来てから最初の休日、俺はあいつを散歩に連れていった。といっても、水の入ったペットボトルを手に、近所をぶらつくだけだ。地元の商店街でいつものコロケを買い、野良猫をひやかし、並木道を歩いて公園のベンチに座る。日差しの厳しい日だったが、木陰には気持ちのいい風が吹く。

「楽しいか？」あいつは炭酸っぽくなっていた。

暑い日だった。

噴水の中では、子供たちがびしょ濡れになって遊んでいた。その気持ちよさそうなこと。「俺も水浴びしてー」独りごちた。

そういえばお前、暑いのは大丈夫なの？ふと心配になって声をかけ、少しだけ舐めてみると、あいつはそれを無視するように炭酸で、俺を一滴、あの噴水に垂らしてみろ。いたずらっぽくそう言っている。初めての外ではしゃいでるんだろう。そう思いながら俺は、注意深く、ほんの一滴だけ、噴水に垂らしてみる。すると噴水から勢い良く水が吹き上がった。その勢いは尋常ではなく、水が出る石像を吹き飛ばして10mほどの水柱を作っていた。

うろたえながら、噴水に向かって声をかける。わかった！楽しいのはわかったから！やりすぎだ！はしゃぎ過ぎ！噴水の水はすぐに収まり、あとにはびしょ濡れになった俺と子ども、そしてその母親が啞然として残された。

俺はそそくさと家に戻った。揚げたてのコロッケも、ぐっしょりと濡れていた。

俺のマンションに、黒づくめの男たちがやってきたのは、その翌日だった。レスラーのような大男二人の前に、ひよろりとした長髪の男が立っている。

「突然の訪問で失礼致します。単刀直入にお聞きしますが、最近何か、珍しい薬品を手に入れましたか？」

「薬品？なんのことですか？」

そう答えながら俺は、背中に汗が流れるのを感じた。あいつのことだ。たぶん公園で見てたやつらからバレたんだろう。こいつらが何者かはわからないが、きっとあいつを持っていき、科学的な調査をおこなうに違いない。そうなったら、あいつが人格を保ってられるか……

長髪の男は尖った顎に手をやり、

「隠し立てするのか、本当に知らないのか、情報が偽物だったという可能性もあるが、リスクは早めに刈り取っておいたほうが……」

「刈り取る？何ですかあなた方、用が済んだら帰っていただけませんか？こちらも暇じゃあない」

「あいにく、帰れと言われて帰れるような、ガキの使いじゃないんでね。よし、入ろう」

「入るってあんた、どういう、」

言い終わらないうちに、後ろの男が大きなペンチを差し入れてきて、ドアチェーンを事もなげに切断した。俺は必死でどうしたらいいか考えながら、あいつのペットボトルを取って、少し口に含む。

俺を便所に垂らせ！辛くなったあいつは、はっきりとそう言った。いや、言ってはいない。明確に意思を感じただけだ。迫り来る男の脇をくぐって便所へ入り、急いであいつを便所に垂らす。ドポリ。焦っていたため、多めにこぼれてしまった。身を伏せる。間髪入れずに便所から水が噴き出て、黒づくめの男たちに襲いかかる。壁まで押し戻され、視界も奪われた男たちの脇を抜け、外へと飛び出す。

裏に止めていたバイクにまたがる。とにかくこの場を離れなければ。それだけを考えて、俺たちは走り出していた。

長い逃避行の末、俺たちは鳥取砂丘にいる。バイクは失ったが、この見渡す限りの砂漠では、やつらも追跡する術を持たない。だがこの砂漠を脱しない限り、俺たちに未来はない。すでに日は昇りかけているが、いくら歩いても、砂、砂、砂。空にはハゲタカが円を描き、俺たちの死肉を狙っている。

たぶん俺たちは助からない。砂が俺たちの骨を、奴らから隠してくれるだろう。そう期待して、このメモを書いている。願わくば、この伝言が奴らではない誰かの手にわたり.....

\*\*\*

手にわたり、その人にどうして欲しいのだろう。俺はそこで手を止め、メモをポケットにしまった。行き詰まっちゃったなあ。そう語りかけ、一口あいつを舐めた。あいつはずっと、俺を全部飲めと訴え続けている。

「それはできないって、何度も言ったろう。ふたり一緒に生き残るんだ。ダメなら、ふたりとも死ぬだけさ」

そう言ってまた、あてもなく歩き出す。

あいつはもう、ペットボトルの底1cm分くらいしか残っていない。そして、薄々気づき始めている。自分が腐りかけていることを。

地平線の向こうから、太陽が無慈悲に顔を出す。俺たちは太陽に背を向け、逃れるように歩く。時折吹く風が、顔に砂を打ちつける。砂のように乾いた肌に砂は張り付かず、そのままサラサラと零れ落ちる。

俺は腹を決め、砂の上に座り込んだ。

「なあ、俺と一緒に、後悔してないか？」

(ひどい一週間だったが、それなりに楽しんだよ)

「水にしては、スリルのある人生だったんじゃないか？」

(浄水設備をくぐるのに比べたら、屁でもないさ)

(それより、最後に頼みがあるんだが)

口の中に残ったあいつが、そんな風に変化した。

「なんだよ、サッカーには連れてってやれないぞ？」

(俺を全部飲んでくれ)

「またそれかよ、ダメだって言ったろ？死ぬときは一緒に死ぬんだ」

(考えがあるんだ、あいつらに痛い目を見せる方法さ)

「あいつらに痛い目を見せるたって、ここは鳥取砂丘のど真ん中だぜ？あいつらにお目にかかることもできねえよ」

(だから、俺を一気に全部飲むんだ。まとめて飲めば、俺はおまえの中でも自我を保ってられる。まあ、ほんの少しの間だろうけどな。その間は、俺がお前の身体を冷やしてやろう。その間に、お前は砂漠を脱出するんだ。そしてそのあとは.....)

「ダメだ！そんなことはできない」

(頼む、やらせてくれ！どうせ俺は、あと2日もありゃあ腐っちまう。気づいてたんだろ？俺の味が変わってきたことに。このまま死んだんじゃ、怒りで沸騰しちまって、地獄の煮え湯に使われるのがオチだぜ)

俺はペットボトルを、いや、その中のあいつをじっと見つめた。そして思い出していた。こいつが来てからの日々を。

「さっき言い忘れてたけど、俺も楽しかったぜ」

一度深く息を吐く。

「じゃあな」

そう言って俺は、あいつを一気に飲みほした。あいつは少ししょっぱかった。涙に似た味だった。

「なるほど、なるほど。このメモのおかげで、事情を聴取する手間が省けました。君はその後、鳥取砂丘から生還し、我々の保護を受けた。それで全てですか？」

「ああ、拷問を保護と言うならな」

ひよろりとした長髪の男が舌打ちすると、後ろの大男が俺を殴りつけた。口の中に血の味が広がる。俺はそいつを、長髪の男の顔に吹きかけた。間髪入れずに大男の2発目が飛んでくる。

「これだからこういう人種とは関わりたくないのです……しかし素晴らしい。このメモに書かれていることが本当ならば、我々は究極の技術を手に入れたことになるのです。このメモはさしずめ、水からの伝言、といったところでしょうか」

「水からの伝言、か」

俺はあいつと話した日々を思い出し、下を向いて吐き捨てるように笑った。

「残念ながら、水自体は持っていないようですが、どこかに隠したか、すべて飲んでしまったか……飲んでしまったのなら、彼の体から取り出す必要がありますね……」

「取り出す？まったくエグいことを考えるものだぜ。だが、それには及ばねえ。もうお前に渡してるんだからな」

「どういうことです？」

そう言う男の顔が、いつの間にか異常に赤くなっていた。

「君は私に、何かしたのですか？答えなさい！」

「わかるだろう？血だって水分なんだぜ」

男の顔が青ざめた。実際には真っ赤だ。

「そう、あいつは俺の血から、お前の中に入った。人間の体は、約70%が水分でできている。そしてあいつは、水をコントロールする。冷やすことができれば、熱することもできるってわけだ」

「待って、待ってください。こんなことをして、ただで済むと思っているのですか？そうだ、我々はパートナーになりましょう。そのつもりで君を呼んだんです」

「よくもそれだけ口が回るもんだ。だが、俺に言ったところで無駄だ。今お前を熱しているのは、俺じゃなくて、あいつの意思だからな」

男の顔が絶望に歪む。皮膚には大きな水ぶくれがポコポコとでき、湯気が上がっている。

「あのメモの他に、お前への伝言をはずかっている。『天国まで一緒に蒸発しようぜ』だってよ」

言い終わると同時に男の水ぶくれが全て破裂し、大量の水蒸気が宙に舞った。

足元には体中の水分が抜け、ミイラとなった男の死体が残されていた。